

茶



(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
[9月] 秋肥 (元肥)	微生物と有機物、N・Caを同時に散布して、スキ込み、深耕して地力作りを行う ※この後、10月以降に、根にデンプンが蓄積され(1~2月に最大)、また10~12月に冬芽が形成される	●ラクトバチルス600g →排水・通気と保水性がよく、肥沃な土を作る。 耕土深くまで均質になり、盤層形成を防ぐ。 ●敷草・ワラ・堆厩肥1トン以上 ●硫安80kg ※敷草・堆肥等が不足の場合は複合肥料でNK成分:各16kg程度。 ●田畑の大将<赤> 40kg ※茶樹の好適土壌pHは5.0~5.5で、好酸性作物と言われる。しかし実際には、pH4.5以下で生長が悪くなった茶園がよくある。逆にpH5.5~6.0でも(根が強く、根圏土壌のpHが5.5以下になれば)生長の良い茶園も多く見られる。従って茶園でも、極端には酸性にせず適度なpHになるように調節する事。 ※茶園の中で水が溜って流れる部分だけが、酸の溶出で高pHになり、枝先が細く枯れる事がよくある。その部分は(赤)を3倍量施用。 ※このカルシウムは土壌の団粒化も促進する。 ※茶にも当然カルシウム栄養とイオウが必要。特に秋肥のカルシウムは根へのデンプン蓄積を強く進め冬芽を充実させ、一番茶の生長を促進する。
[2月下旬] 春肥	全面に散布し、ウネ間に多くする(特に硫安) ※3月下旬から伸びる春芽の栄養補給	●マンゾク粒状30kg →根の強化・萌芽の促進 ●硫安60kg (N成分:12kg) ※同時に散布する。本来の理想的方法は、春根が動出す直前にマンゾク粒状、動き出して10日頃に硫安(出来れば10日間隔2回に分施)と分けて施肥。根っ酵素も発根時にタイミングが合えば効果的。 ※芽出し肥には、マンゾク粒状10~30kg、根っ酵素がよく効く。
[5月] 夏肥①	一番茶摘採直後 ※5~6月に伸びる腋芽(二番茶)のための栄養補給	①根っ酵素5ℓを灌注(300倍程度)または葉面散布 →傷んだ根を回復させ、新根を動かす。(摘採直後か摘採中に使用) ②硫安40kg (N成分:8kg) ※①の後4日目に(すでに根が動いている)施用 ※②をやらない場合は、マンゾク粒状10kg~30kgを同時施用
[7月] 夏肥②	二番茶摘採直後 ※7~8月の三番茶のための栄養補給	①根っ酵素5ℓを灌注(300倍程度)または葉面散布 →傷んだ根を回復させ、新根を動かす。(摘採直後その日に使用) ②硫安40kg (N成分:8kg) ※①の後4日目に(すでに根が動いている)、施用 ※②をやらない場合は、マンゾク粒状 10kg~30kgを同時施用
[8~9月] 秋	三番茶摘採後 ※秋の養分蓄積のための調節	●根っ酵素2ℓを灌注(300倍程度)または葉面散布 ※摘採直後に使用し、傷んだ根を急いで回復させ、秋の蓄積に備える。 ●花咲くCa液500倍を葉面散布または2ℓ灌注 →秋冬、光合成を盛んにし、養分蓄積をうながし、翌年の春芽を強くする。

【特に弱い樹への対策】芽の生長や出開きが悪い、落葉する、枝先の伸びが悪いなどの場合は、根っ酵素の灌注(300倍液)や、マンゾク粒状30~50kgを散布する。特に土壌pH(根の傍、深層)が高い、根のpH(根酸)が5.5より高い(理想値4.5以下)場合は、この方法で回復する。

【造成園】苗木(さし木)・植付けの時には、木の周囲に根っ酵素300~500倍でタッブリ灌注する。幼木園では施肥量を、1年目1/6とし、2年目から徐々に増やす。カルシウムも同様に。幼木は特に根が弱いので、マンゾク粒状や、散水時に根っ酵素を使用する。